

第103回定期演奏会

PROGRAM

ジェームズ・マクミラン: **ブリタニア** (約13分)James MacMillan: *Britannia*ブルッフ: **スコットランド幻想曲** op.46 (約30分) ★Max Bruch: *Scottish Fantasy, op.46*

- 序 グラーヴェ *Grave*
- 第1楽章 アダージョ・カンタービレ *Adagio Cantabile*
- 第2楽章 アレグロ - アダージョ *Allegro - Adagio*
- 第3楽章 アンダンテ・ソステヌート *Andante sostenuto*
- 第4楽章 フィナーレ: アレグロ・ヴェリエロ *Finale: Allegro guerriero*

— 休憩 (20分) — *Intermission*メンデルスゾーン: **交響曲 第3番** イ短調 op.56 「スコットランド」 (約40分)Felix Mendelssohn: *Symphony No.3 in A minor, op.56, "Schottische"*

- 第1楽章 アンダンテ・コン・モート *Andante con moto*
- 第2楽章 ヴィヴァーチェ・ノン・トロツポ *Vivace non troppo*
- 第3楽章 アダージョ *Adagio*
- 第4楽章 アレグロ・ヴィヴァチッシモ *Allegro vivacissimo*

指揮: 下野 竜也 *Tatsuya Shimono, Conductor*ヴァイオリン: 三浦 文彰 *Fumiaki Miura, Violin* (★演奏曲)ハープ: 早川 りさこ *Risako Hayakawa, Harp* (★演奏曲)管弦楽: 兵庫芸術文化センター管弦楽団 *Hyogo Performing Arts Center Orchestra*2018 **2/16(金)・17(土)・18(日)** 3:00PM開演兵庫県立芸術文化センター **KOBELCO** 大ホール

主催: 兵庫県、兵庫県立芸術文化センター

※演奏時間は目安となります。前後する可能性がありますので予めご了承ください。

助成:  文化庁文化芸術振興費補助金
(舞台芸術創造活動活性化事業)

これさえ
見れば
わかる!

今回の聴きどころ

東条 碩夫 (音楽評論家)

スコットランドの魅力音楽で

英国が4つの国からなる連合王国(United Kingdom)であることは周知の事実。だが、それら各国の気質は大いに異なっている。たとえば、こういう小話がある。

ある細い道で、見ず知らずの2人の英国人が出逢ったとする。それがイングランド人同士だったら、すました顔で、黙ってすれ違う。ウェールズ人同士だったら、すぐに人懐っこくおしゃべりを始める。アイルランド人同士だったら、すぐ一緒に酒を飲みはじめる。ではスコットランド人同士だったらどうか——たちまちケンカをはじめる、という具合である。ただし、こういう話の常として、いろいろ異なるバージョンがあるので、アテにはならない。

今日はそのスコットランドに因む作品が並ぶ。「ブリタニア」を書いたマクミランは、スコットランド出身の作曲家だ。ドイツの作曲家ブルッフが書いた「スコットランド幻想曲」は、4つの歌を素材としている。そしてメンデルスゾーンの交響曲「スコットランド」は、同国の首都エディンバラを訪れた際に着想されたものだった。

音楽は、気質を反映するだろうか？



ライターおすすめ

必聴POINT

ジェームズ・マクミラン: 「ブリタニア」

英国の現代作曲家による奇抜な音楽

ケンカの音楽ではないが、かなり強烈。不思議な音響も出現する。雑然たる雰囲気だが、これもかつてマーラーやアイヴズ他により試みられた、れっきとした作曲技法のひとつ。

ブルッフ: スコットランド幻想曲 op.46

4つの楽章にスコットランドの歌が登場

「ヴァイオリン協奏曲第1番」で有名なブルッフが、同じくソロ・ヴァイオリンを活躍させて書いた美しい曲。日本ではスコットランド民謡はおなじみ。何となく懐かしい感もある。

メンデルスゾーン: 交響曲 第3番 イ短調 op.56 「スコットランド」

流麗な曲想、劇的な盛り上がり

4つの楽章は続けて演奏される。この曲の原点となった全曲冒頭の主題は、注意深く聴いておくことをお奨めしたい。これは、全曲の最後で、重要な意味を持って来る。

第103回定期演奏会

PROGRAM NOTE

[曲目解説]演奏をより深く楽しむために — 東条 碩夫(音楽評論家)



ジェームズ・マクミラン:「ブリタニア」

初演:1994年9月21日 ロンドン

ダイナミックな音響、楽しい「ノイズ的」音楽

今日の英国の現代作曲界は多士済々たるものがあるが、その中でもジェームズ・マクミランの名は、日本にも比較的良好に知られているほうだろう。指揮者として来日したこともあるし、シャルル・デュトワがNHK交響楽団を指揮して2003年に初演した「交響曲第3番《沈黙》」は、遠藤周作の小説を題材にしたものである。

「ブリタニア」は1994年に作曲・発表されたもので、「愛国」をテーマにしているものの、「欧州に再び頭をもたげはじめた狂信的な愛国心」への皮肉を滲ませつつ、「特定の筋書のない幻想曲風作品」(注1)として仕上げられている。内容は、フォークミュージック、酒の歌、軍楽から英国国歌にいたる雑多な素材が、彼特有のパワフルな音響でコラージュされているが、その手法は、ロンドンの光景を混然たる音響で描いた英国の先達作曲家エルガーの「コケイン序曲」やヴォーン・ウィリアムズの「ロンドン交響曲」第1楽章などの流れを汲むものとも言えよう。

[作曲家プロフィール]

ジェームズ・マクミラン (1959 -)

James McMillan

スコットランドのキルウィニング生れ。先祖はアイルランドからの移民であるともいう。1990年、中世の魔女裁判を題材にした「インゼル・ガウディの告白」を発表して作曲家としての名声を確立、「来たれ、来たれ、エマニュエル」(1992年)、「チェロ協奏曲」(1997年)、「十字架上のキリストの最後の七つの言葉」(1993年)など作品は数多い。指揮者としても活躍中で、2000~2009年にはBBCフィルの専属作曲家・指揮者を務めたこともある。



楽器編成

フルート3(ピッコロ持替)、オーボエ3(イングリッシュ・ホルン持替)、クラリネット3(バス・クラリネット持替)、バスーン2、コントラ・バスーン、ホルン4、トランペット3、トロンボーン2、バス・トロンボーン、テューバ、ティンパニ、大太鼓、シンバル、パウロン、タムタム、小太鼓、ヴィブラフォン、トムトム5、トライアングル、フレクサトーン、ウッドブロック2、カウベル2、コナッツシェル、鞭、クラクション、ダックコール、ホイッスル、オートホーン、ハーブ、弦楽5部

ブルッフ:スコットランド幻想曲 op.46

初演:1881年2月22日 リヴァプール

スコットランドの雰囲気が満載

スコットランドの民謡等といえば、「オールド・ロング・サイン(蛍の光)」「アニー・ローリー」「ライ麦畑で出逢ったら(故郷の空)」「スコットランドの釣鐘草」「勇敢なるスコットランド」など枚挙に暇がない。ただしこのブルッフの「スコットランド幻想曲」には、あいにくそれらは登場しない。

作曲は1879~1880年に行なわれた。きっかけは、ウォルター・スコットの小説を読んだことにあるといわれる。スコットランドの民謡などの旋律を知ったのは、出版されている曲集によるとされる。ただ、彼は1880年からの3年間、イングランド北西部のリヴァプールのオーケストラの首席指揮者を務めたので、その英国滞在中に、いろいろな曲に正確な形で触れ、素材を集めることができたのかもしれない。

曲は、やや陰鬱な序奏で開始され、やがてスコットランドの4つの歌を素材とした美しい主部に移っていく。

第1楽章に登場するのは、「Auld Rob Morris(老いたロブ・モリス)」あるいはそれと同じ旋律を持つ「Thro' The Wood, Laddie(森を抜けて行け、若者よ)」である。



[作曲家プロフィール]

マックス・ブルッフ (1838 - 1920)

Max Bruch

ドイツのケルンに生れ、リヴァプール・フィル首席指揮者を務めた後、プレスラウの管弦楽団指揮者、ベルリン王立芸術アカデミー教授と副院長などを務め、ケンブリッジ大学の名誉博士号も受けた。3つの交響曲、2つのヴァイオリン協奏曲をはじめ、多くの合唱曲を作曲。代表作は「ヴァイオリン協奏曲第1番」とこの「スコットランド幻想曲」、「コル・ニドライ」など。ドイツロマン派の時代に属するが、作風は温厚で平易である。



NO IMAGE

PROGRAM NOTE

第2楽章は、「Dusty Miller(粉まみれの粉屋)」がその原曲といわれる。

第3楽章には「I'm a Doun for Lack O' Johnnie」という曲が使われているが、これは「ジョニーがいなくてがっかり」という訳で知られ、ポップスにも編曲されておなじみだ。スコットランドの民謡などによくある独特の旋律型が不思議な懐かしさを感じさせる。

第4楽章は、「Scots wha hae」(スコッツ・ホワ・ヘー)。ロバート・バーンズの詩による、スコットランド人たちに呼びかける「戦いの歌」である。この旋律は、ベルリオーズも「ロブ・ロイ」序曲に引用している。

初演は、ブルッフ自身の指揮するリヴァプール・フィル、および彼が作曲に際しアドヴァイスを得た名ヴァイオリニスト、ヨーゼフ・ヨアヒムのソロで行なわれた。

楽器編成

ヴァイオリン独奏、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、バスーン2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン2、バス・トロンボーン、チューバ、ティンパニ、太鼓、シンバル、ハーブ、弦楽5部

メンデルスゾーン: 交響曲 第3番 イ短調 op.56 「スコットランド」

初演: 1842年3月3日 ライプツィヒ

メンデルスゾーン最後の交響曲、円熟期の名作

メンデルスゾーンは、1829年の初夏に初めて英国を訪れ、ロンドン・フィルハーモニック協会の演奏会で指揮をし、大成功を収めた。そして7月にはスコットランドへ足を延ばしたが、その首都エディンバラを訪れた際に着想を得たのが、この交響曲なのである。ただし完成はずっと先——1842年1月、ベルリンにおいてであった(注2)。

エディンバラは、今でも中世の雰囲気を残す古都である。山上には堂々たるエディンバラ城が聳えているが、それとは別の場所に、16世紀のスコットランド女王メアリー1世が住んだホルリード宮殿がある。この宮殿の一室で、彼女の寵臣リッチオが1566年3月9日、彼女の夫ダーンリー卿らの手で、しかも彼女の目の前で暗殺されるという有名な事件が起こった。このメアリー・ステュアート(注3)は数奇な生涯を送った女性で、のちに王位を追われ、イングランド女王エリザベス1世の命で処刑されるという悲劇的な運命をたどるのだが、メアリーの子ジェームズはスコットランドとイングランドの王となり、その後の英国の王たちに彼女の血を残すことにもなる。因みに、メアリーが処刑されたのは1587年、現在のグレゴリオ暦でいえば、奇しくも2月18日のことである。

遡って、彼女がスコットランド王に即位(1543年)したのは、前述の宮殿のすぐ傍にある教会の礼拝

堂においてであった。だが、メンデルスゾーンが訪れた当時は、「礼拝堂は屋根もなく荒廃し、蔦や草が生い茂り、明るい空の光が射し込む」状態だったという。栄枯盛衰を感じさせるこの場所で、彼は「1829年7月30日、エディンバラ」という日付のある第1楽章冒頭の序奏主題のスケッチを書いたのだった。

ゲヴァントハウスでの初演後、彼はロンドンでもこの曲を指揮したが、それと相前後して彼はこの曲に大幅な改定の筆を加えていた。今日演奏されるのは、この改訂稿によるものである(注4)。

第1楽章は前述の憂いに富む序奏主題で開始され、嵐のように激しい曲想へ発展していく。第2楽章は一転して軽快、冒頭の主題に、スコットランドのバグパイプの響きを連想する方もおられよう。第3楽章は静かなアダージョとなり、2つの主題で構成されるが、憂愁感をたたえ、メンデルスゾーンならではの叙情美に充ち溢れる。彼の交響曲の緩徐楽章のうちで、最も美しく、魅力に富むものではないだろうか。

第4楽章は急速なテンポで、嵐のように激しく進むが、いよいよ終結近く、それが弱まっていったところへ、突然、壮大な終結主題が巻き起こる。これは全く新しい主題のように思われるが、よく聴けば、それが第1楽章冒頭の、あの「礼拝堂の廃墟で着想された」主題が、明るく壮麗な雰囲気になって展開されたものだということがわかるのである。こうしてメンデルスゾーンはこの交響曲を、最初の発想と同じところに戻るといって、見事な手法で結んでいくのであった。

(注1) 作曲者のノートによる。

(注2) メンデルスゾーンの交響曲の番号は、作曲順とは異なる。

(注3) ドニゼッティのオペラ「マリア・スチュアルダ」をはじめ、多くの演劇、小説、映画などのヒロインになっている。

(注4) ほぼ初稿に近いと思われるロンドン初演稿による演奏は、リッカルド・シャイー指揮のCD(デッカUCCD 1249)で聴くことができる。現行版とは各所に大きな違いがあり、音の響きも鋭角的で、荒々しいダイナミックな個所も多い。

楽器編成

フルート2、オーボエ2、クラリネット2、バスーン2、ホルン4、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部



【作曲家プロフィール】

フェリックス・メンデルスゾーン (1809 - 1847)

Felix Mendelssohn

ハンブルクに生れたドイツ前期ロマン派最高の作曲家のひとり。38歳の短い生涯の中で、各ジャンルに多くの珠玉の作品を残した。交響曲には、第5番までの作品の他、初期の弦楽のためのシンフォニア12曲がある。「夏の夜の夢」「ヴァイオリン協奏曲小短調」「フィンガルの洞窟」なども有名だ。また名指揮者としても知られ、誇張を排して正確な演奏を標榜するというその指揮のスタイルは、今日まで続く指揮者の流派のひとつを形づくっている。